

横浜市インフルエンザ流行情報 16号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

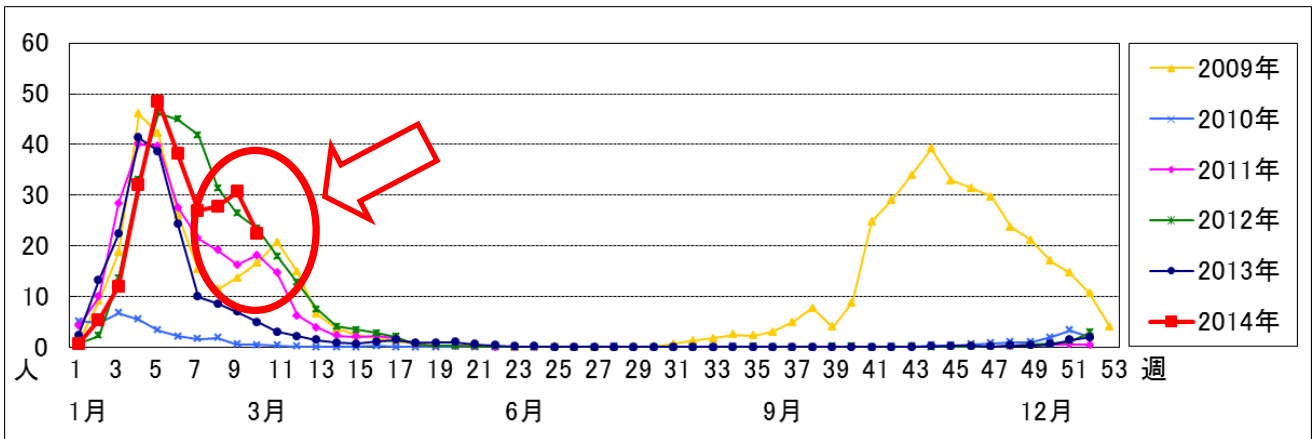
《トピックス》

- 2週連続で増加していた**報告数が減少に転じましたが**、依然として流行が続いています。
- 感染予防や早期受診などの対策^{※1}が重要です。

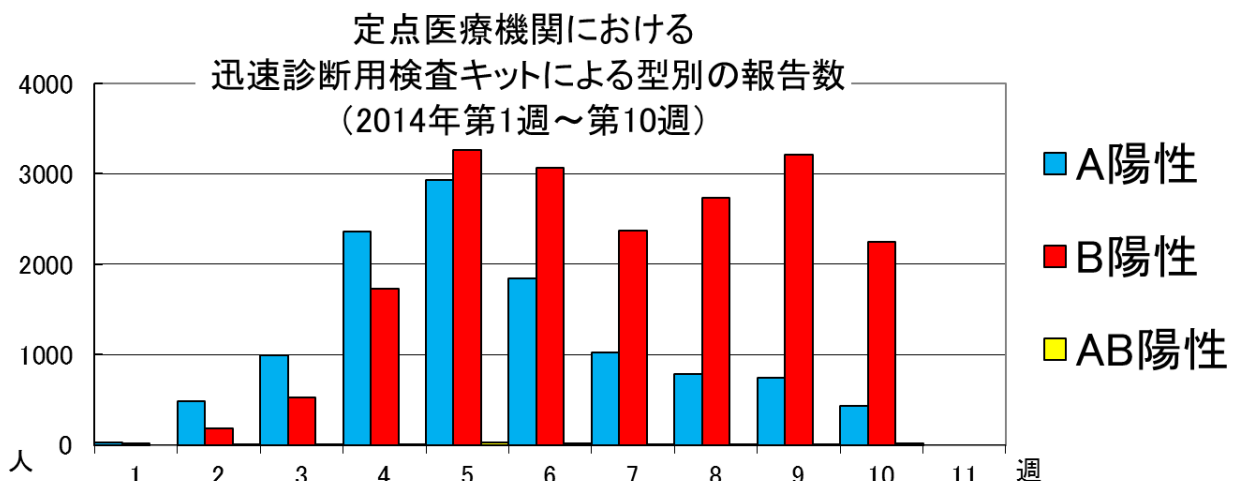
※1 [インフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたり^{※2}の患者報告数は、第8週(2月17日~23日)27.80、第9週(2月24日~3月2日)30.66と再上昇していましたが、第10週(3月3日~9日)は**22.46**と減少に転じました。ただ、報告数は高い値で推移しており、インフルエンザの流行には引き続き注意が必要です。

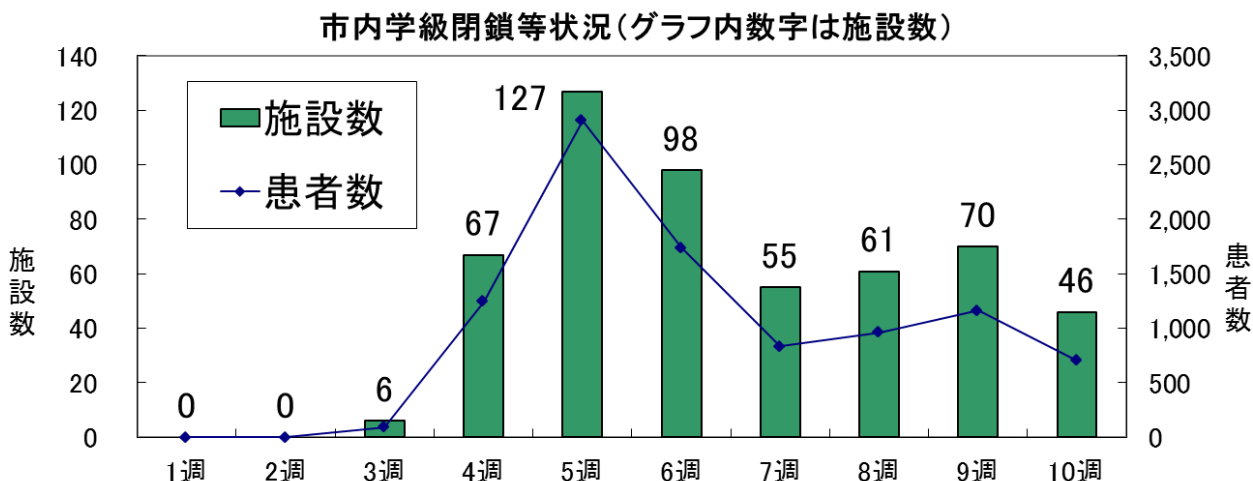
※2 定点・定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内152か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。



2 迅速キット結果:第5週以降A型、B型ともに減少していましたが、第8週、第9週と2週連続して増加していたB型が第10週は減少しました。また、A型もさらに減少しました。第10週はA型16.0%、B型83.4%、A型B型ともに陽性0.6%と、**B型が8割以上**を占めています。

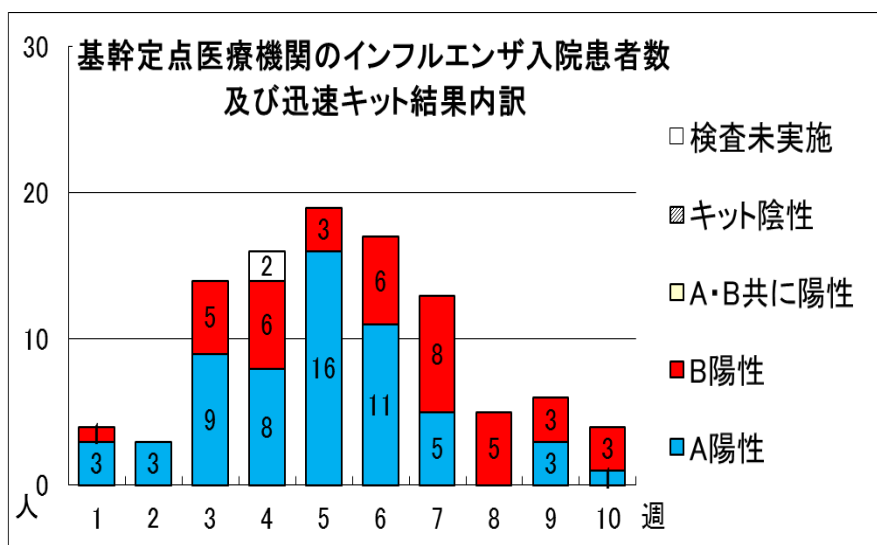


3 市内学級閉鎖等状況:閉鎖施設数は第 8 週以降再増加していましたが、**第 10 週ではふたたび減少しました**。第 10 週の施設種別では、小学校 38 件、幼稚園 5 件、中学校 2 件、高校 1 件でした。今シーズンの学級閉鎖等に伴う累計患者数では、小学校の患者数が全体の 8 割以上を占めています。

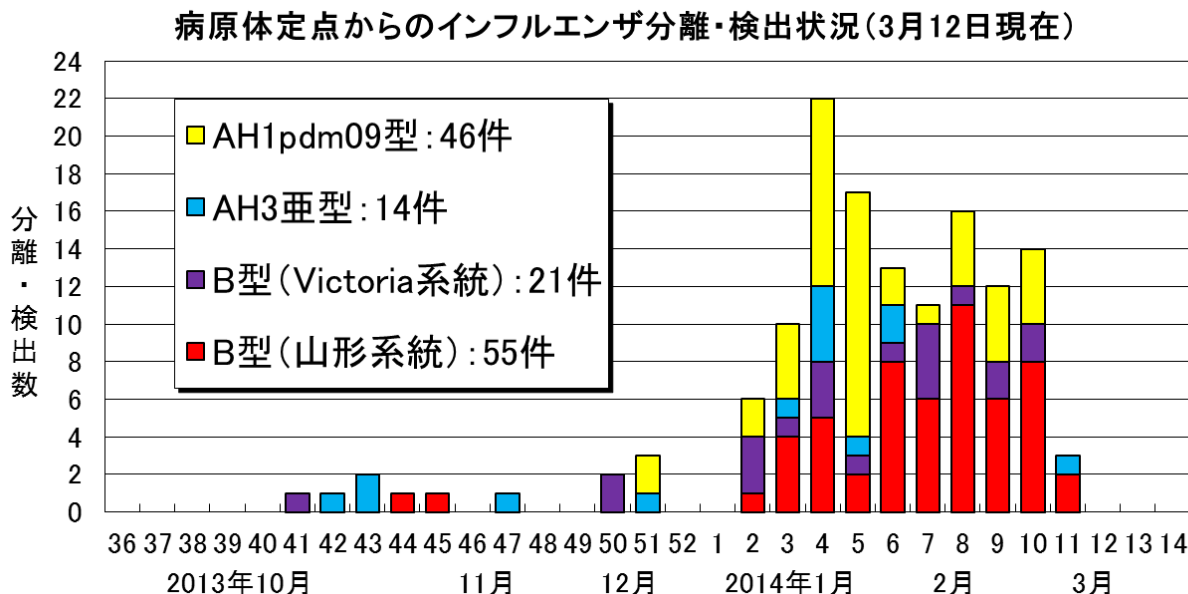


4 入院サーベイランス:基幹定点医療機関^{※3}における、インフルエンザ入院患者数は第 8 週以降ほぼ横ばいです。第 10 週は B 型の方が多くなっています。

※3 基幹定点:患者を 300 人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には 4 つの基幹定点があります。



5 市内病原体検出状況:第 6 週以降 B 型、特に**山形系統**が多く検出されています。なお、Victoria 系統は今シーズンのワクチンに含まれていません。



6 分離株の耐性検査: 衛生研究所で **AH1pdm09 型の 72 株を検査したところ、耐性ミックス株 (275H/Y)**(注:薬剤治療中または治療後の患者の検体からは、薬剤により耐性が誘導された株と通常の株がミックスされたもの(耐性ミックス株)が検出されることがあります。通常はそのウイルスが地域で流行することはありません。最近話題になっている耐性株とは異なります。)が 3 株見つっていますが、**耐性株(275Y)は見つかりません。**ただ、耐性ミックス株を国立感染症研究所で検査したところ、3 株のうち 2 株では**オセルタミビル及びペラミビルへの感受性が低下**しており、ザナミビル及びラニナミビルに対しては感受性を保持していました。残る 1 株はオセルタミビル及びペラミビルなどへの感受性低下はみられませんでした。

7 区別流行マップ

